

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 イブセン『人形の家』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 48 回のツイキャス読書会の課題図書は、イブセンの『人形の家』です。

青空文庫はこちら http://www.aozora.gr.jp/cards/001566/files/52505_50610.html

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『人形の家』 感想文

ノラはぶっ飛んだ女の人だなと思いました。

いくら家族の為とはいえ、署名を偽造するなんて大胆な行動は普通では出来ないなと思いました。

ほんとに法律的にはいけない事だと知らなかったとしたら女の人はずっとまともな教育を受けられなかったという事になるから可哀相だと思うし、もし知っててなら怖い人だなと思うし…どちらなのかよく分かりませんでした。

ノラとヘルメルは、一応夫婦ではあるけれどちゃんと話し合った事もなく世間体の為だけの夫婦だなと思いました。

でもこんな夫婦は一般的にはよくある話のような気もしました。

旦那は、奥さんを一人の人間として見ていない飾りのようなものか、家政婦さんだと思ってる人も多いのではないかと思います。

夫婦は対等だと思ってる人がどれだけいるのかな？ と思います。

男の人は、言ってあげなきゃ分からないのでヘルメルみたいに「寝耳に水」状態になる人も多いと思います。

ノラは、ぶっ飛んだ性格だからもし実家がなくても人形の家から飛び出して行ったのかな？と思いました。

帰る所がない場合でも、人形の家から飛び出す事ができるような社会ならいいなと思いました。

私は人形の家でも自分なりに楽しく暮らせそうな気がするから、ヘルメルに出ていかない代わりに自分に有利な条件を要求するかな？（笑）と思いました。

(おわり)

『山の人生』感想文

初めて読みました。

話の山場が第3章の後半にみられ、幾つかの会話が心に残りました。

- ① p111 リンネ夫人「自分一人のために働くということは、ちっとも楽しいことではありません。」

働く目当てとなる人がいることが、働く意欲、生きていく意欲になると彼女は言っています。私もその通りだと思います。だから、少子高齢化がより進んだ未来は、自殺や犯罪が増えないかと心配しています。

- ② p142 ノラ「あたし自身に対する義務です」

これは「ノラに対するヘルメルの義務」とも思いましたが、「人間に対する義務」、つまり「すべての人間に与えられている権利を尊重する義務」という意味かなと思いました。

- ③ p143 ノラ「女には死にかけている父親や、夫の命を救助する権利がないという法律は信じられません！」

ヘルメルが言う宗教上の道徳心や良心に対して、反論するノラを立派だなと思いました。ノラが確実に自立へ歩み出していることを感じました。

- ④ p146 ヘルメル「いかに愛する者のためとはいえ、名誉を犠牲にする者はないぞ。」

ノラ「でも何十万という女はそれをしてきたのです。」「名誉」を重んじる男性は現代でも多いと思います。

身分の高い地位にいる人に付くものなので、昔からその機会を与えられなかった女性差別に対して作者が批判しているのだと思いました。

それにしても、過保護、過干渉極まりないヘルメル氏ですが、ノラに「愛してはいません。」と言われた後もノラの言い分を聞いてあげたり、最後までノラがいなくなるのを悲しんだりしているところから考えると、当時の男性としては良い夫の中に入るのかなとも思いました。

(おわり)

人形の家 ヘンリク・イブセン 読書感想文

「ノラ、お前のためならわたしは夜も昼も喜んで働く。-お前のためならどんな心配も苦しみも耐え忍ぶ。しかしかにかに愛する者のためとはいえ、名誉を犠牲にするものはないぞ」

「でも何十万という女はそれをしてきたのです」

そしてノラは、家族を置いて出て行ってしまふ。夫はなんとか妻を思いとどませようとあらゆる提案を試みるがノラの決意は固い。

でもなぜ幸せな妻を演じつづけられなかったのか。

演じることは人に嘘をついていることなのだろうか。

劇作家の野田秀樹が、TVのインタビューでこう答えていた。

「人は生まれながらに役者です。物心がついてから無意識に、親の前では子どもを演じ、友人の前では理解ある友を演じ、恋人の前や夫婦ではいいパートナーを演じる。

それは一生をかけて演じきる人生である」と。

一人の独立した人間になりたいと、家を飛び出したノラは、自分で自分を欺いていることに気づいた。

もしかしたら名女優さながらに最後まで演じつづければよかったのではないか。佳き妻であり佳き母を。ただし女性の地位も認めてもらえるようプライドを持って。

1879年ノルウェー、コペンハーゲンで初演。

ノラは観客すべての代弁者であった。が、当時の反撥は大きかったろう。

数年後、日本に入ってきた当時も、革新的な女性があるものと前時代的な「亭主関白」たちはびっくりしたことと思う。

日本で女性の選挙権が認められたのは1945年。ノラが家出をしてから60年以上もあとのことだ。わたしたちはさらにその72年後に生きている。

ノラが理想とした夫婦。

どちらも完全に自由であり、独立した個と個の共同生活。「奇跡中の奇跡」を実現して暮らしている夫婦がどのくらいいるだろう。

別居しながら仲良しを続けている友人夫婦を思い出した。ひとつ屋根の下にいるより、小屋がふたつあったほうがうまくいくのが現代かもしれない。

(おわり)

『人形の家』 読書感想文

親友からの永久のお別れを告げられ、これからふたりっきりになることの不安と喜びの入り混じった複雑な心境で有頂天になったのか「ノラの為に自分が命も財産も何もかも投げ出して、お前を救うという事にぶつかってみたい」とかヘルメルは言い出します。

その言葉にノラは挑戦的になっているのか、クログスタットからの手紙を目の前で読む事を要求します。

ヘルメルは、自室に戻ってからクログスタットからの手紙を読んだ瞬間、ノラを犯罪者呼ばわりし、クログスタットに弱みを握られ抑え付けられる惨めな立場になったと罵倒します。

俺、俺なヘルメルに、ノラは「やっぱり」とドン引きで冷やかです。

また直後、クログスタットからの和解？の手紙が舞い込み、恐る恐る読み終わったヘルメルは喜びの叫びをあげ、「くだらん言い訳はやめろ」とついさっき言ったばかりなのに、自分自身の危険が去ったとたん「お前のした事はすべて私に対する愛情からだということはよく知っている」とのたまひ、ノラの自分の力で物事を処理する能力がない事を問題にし、その頼りない様子に一層魅了を感じるという、これからはもっと強く導くというか束縛していく意向を示します。

編物をしているリンネ夫人に刺繍のほうが優美で編物は支那人のやる事みたいだと主張、仮装したノラに欲情し仮装パーティーでの自分の妄想をノラに語る、親友のランクに気の弱い人と思われている、最愛の妻ノラに「こん畜生！」とこころの奥底で思われている、「いざ」という時ダメだったヘルメル！

夫が自分の為に何もかも投げ出してくれる事を「奇蹟」といい、ずっと自己撞着し続けてきたノラ。

甘んじる事なく出て行くノラの勇気や意志、時代も考えるとすごい事だと思いました。

(おわり)

『 マクロンは隠してね 』

私は猫を二匹飼っている。もちろん、彼らになんかしらの労力や行動を望んでいない。傍にいてくれるだけで和み、癒される愛玩としての役目は十二分に果たしている。

ただ、人間には「愛でたい」という欲も三大欲の陰に潜んでいるように思う。それは、ただの愛玩ではなく、対象物に対する支配欲なのだ。対象物を自分なしでは立ち行かないという影響下のもと上からの「可愛がり」なのだ。それは、可愛がる立場の人間からすると歪んだ自己肯定のひとつかもしれない。

その構図は人間と動物だけでなく、日常的に人間社会でも発生している。上司が部下のことを「こいつのこと可愛がってんっすよ。」もそうだろう。それが、夫婦間になるとこの小説のノラとヘルメルだ。

「愛でる」対象物が人間であると、もちろん意志があり、その意志を表に出すと「愛でる・愛でられる」関係が壊れるとの暗黙の了解が成立する。それゆえ上手に自らの意思を隠しつつ「愛でられる」のだ。「愛でられる」方にも快感はあるからだ。ただノラは、その関係を愛情だと信じようとしていたことに悲劇があったのだと思う。ヘルメルの為の借金や自らの内職のことも隠すことが夫に対する愛だと信じていた。ノラは、ヘルメルも自分の為なら地位も財産も名誉も投げ出してくれる「愛」を持っていると信じていた。しかし、クログスタットの脅迫により、ヘルメルの愛の化けの皮は脆くも剥がれてしまった。

私は、人間は自らをすべてさらけ出しているとは思わないし、それがベストだとも思わない。相手を想うからこそその嘘や罪のない虚飾は仕方ないのだと思う。ノラがマクロンを隠れて食べたように。リンネ夫人のように、辛酸を舐めた自立した女性が自ら「生きがい」のためにクログスタットと復縁を決めることもある。やはり、どこかヘルメルのように何かを愛玩する欲は確かにあるし、自らが選んだ道だ。しかし、「愛玩」を愛だと信じていたノラは、それが愛でなかったことに気が付いたら、もう戻れない。

男女雇用均等法が成立して、30年が過ぎた。今では、働く女性の3割が専業主婦を希望しているらしい。(ソニー生命保険調べ)ノラのように乳母や女中がいなければ、仕事と子育て・家事とを両立するのは難しい。リンネ夫人のように社会の現実を経験してきた女性たちに、未来が開けると信じた30年前の揺り戻しがきているのかもしれない。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

「自由からの逃走」

「イブセンの人物に似ているのは里見のお嬢さんばかりじゃない。今の一般の女性(によしょう)はみんな似ている。女性ばかりじゃない。いやしくも新しい空気に触れた男はみんなイブセンの人物に似たところがある。ただ男も女もイブセンのように自由行動を取らないだけだ。腹のなかではたいていかぶれている」

夏目漱石の『三四郎』のなかで与次郎のセリフだ。

ノラのように、夫との偽りの関係に気がついて、鳥かごからでていく現実的な決断を私たちは、ほとんどしていない。自由行動に憧れているけど、あくまでも腹の中だけの話だ。

音楽やドラマや漫画のなかでは、自由に生きる登場人物を愛しているが、現実生活では、どうだろう？ 野々宮さんに好意を持ち、振り向いてほしくて大胆にふるまったが、結局は、お見合い結婚してしまった『三四郎』の美禰子のように、現実的な選択に落ちついている。

自由に行動できるフリはしているが、ホントに自由かというと、全然自由じゃないんだな、これが。エーリッヒ・フロムじゃないけれど、むしろ『自由からの逃走』だ。

『人間は自由なものとして生まれたが、いたるところで鎖につながれている。』とは『社会契約論』のルソーの言葉。自由だ！ 愛だ！ と青春のドラマは訴えるが、せめて、他より見栄えのする鳥かごを見つけるので精一杯だ。

報道に携わりたいと思って、大手メディアに就職すれば、鳥かごの鳥であることを嫌というほど思い知るだろう。報道の自由とは名ばかりで、幾重もの鎖のような自主規制にがんじがらめにされている。誰が悪いというわけではない。国家権力が巨悪だというのではない。恐怖ゆえに、たいていは、人間は、自由の前から逃げ出すのだ。

進学、就職、結婚。人生の節目であらゆる選択は、自由に見えて、その都度の妥協である。

ノラのように人形扱いされて、夫の支配下に置かれているのは、この社会の宿命だ。就職すれば会社の支配下だ。権利と義務のもとにコントロールされ、共依存関係を余儀なくされる。権威の壁は厚い。自由は、卵のように脆い。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343